

## 心の目で見ると

静岡県 城内中学校 1年 高山 慎之輔

「とてもかんたんなことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない。」

これは、サン・テクジュベリの『星の王子さま』の一節で、僕の好きな言葉だ。普段は実感とは遠い言葉なのだが、そう気づかせてくれた友達が一人いる。

「わあ、今日もだ。」

昨日の帰りとはなんとという違いだろう。きれいに片づけられた部室。整頓された防具の棚、ちりひとつ落ちていない床を見て、僕はすがすがしい気持ちになった。

このところ、毎日誰かが部室を片づけてくれているのだが、僕には、誰がやってくれているのか大体わかっている。だが、彼は自分がやると名乗り出るとはきっとないだろう。

なぜ彼は陰で一人、こんな面倒な役目を自らに課しているのだろうか。自分一人の部室でもないのに。先生に言われたのだろうか。誰かに褒められたくてやっているのだろうか。親切心からだろうか。それとも、ほかに何かあるのか。

ある日、僕は彼に直接聞いてみることにした。

「いつも部室片づけてるのって、お前？」

「そうだよ。俺。だって汚ねえじゃん。」

僕は呆気にとられた。あれこれと理由を推測していたのに、すべて外れた。別に、そんなに深い理由があるわけでもなかった。彼にとっては、汚かったから片づけただけ。それだけだったのだ。

同じところに同じようにいながら、汚さに気づいていながら、僕は彼のようにはなれなかった。彼が片づけてくれていると知ってからも、それを手伝うこともなかったのだ。散らかす仲間をたしなめることもなく、誰かを誘うわけでもなく、ただ一人、毎日黙々と片づけ、帰っていったのだ。それをことさらひけらかすこともない彼に、今、尊敬の念を抱いている。

その時、『星の王子さま』の一節を改めて思い出した。そして、わかった。

僕の節穴の目で、彼は心の目で。同じものが映っていながら、行動はこうも別々だった。心の目で見なければ、見えないこともあるんだということ。

また、「親切」とは<sup>いと</sup>労を厭わず人のために尽くす、というよりも、自分の心の持ちようなんだ、と。問いと答えは、自分自身の中にあるものなんだ、ということ。

これからは彼を見習おう。ボランティアや奉仕活動といった大げさなものだけでなく、自分にできることを少しずつでも周囲に広げていく。

そして、変わろう。